

松葉屋

通信

matubaya
-tushin
vol.08
2006.8.12

発行 ■ 松葉屋家具店
026-232-2346

松葉屋
WALK
and
WORK
3



壁掛 1972

前回は、幼年時代好きだった本を通しての「善五郎さんの素」のお話でしたが、今回は、さらに分化し、増えていく「善五郎さんの細胞」のお話。
大好きな絵を見ることが「描きたい」と、門をたたいた横井弘三さんの画塾は小学校に上がる頃に止ってしまいました。その後2〜3年ほど経つと、「やっぱり絵が描きたい」と両親に訴える善五郎少年に、どこでどうお願いしたのかは不明ながら、今度は『田原幸三先生』のお家に通えることになりました。

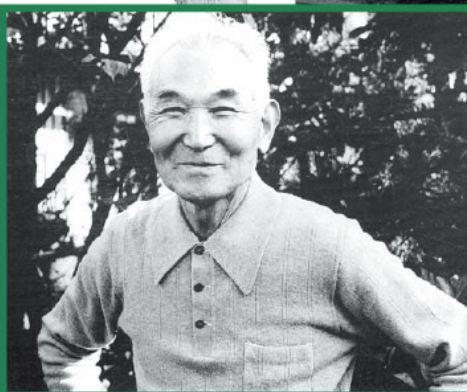
田原幸三先生は、特に画塾を開いていたわけではなかったのですが、善五郎少年は「好きな時に先生のお宅のアトリエで、好きなように絵を描いていてもいいよ」という、大変贅沢な特権を得たのでした。
「今の自分の8割強はここで見聞きし、触れて、感じたことよって培われたと云っていい」といふほど。先生の何気ない話し方、住まいのしつらえや飾り方、日常の用として使われている先生の作品の空気感、それらに包まれた幸せな時間は、大学入学で上京するまで続きました。



聖観音 1980



戸隠雪景 1983



田原幸三先生

1911年 長野市川中島生まれ

長野師範学校を卒業後、教職にありながらも、石田岩雄氏(工芸)、石井鶴三氏(彫塑)平塚運一氏(版画)、板倉賛治氏、田原輝夫氏(絵画)などに指導を受け、また東京高等師範学校研究科(図画)も卒業する。その後、島根県女子師範学校教諭を経て長野師範学校助教授、信州大学教授と、美術教育と教師育成に力を注ぎながら自身の芸術を追求し続けた。

「彫塑の制作は立体感動にもとづき、形を支配する心樞は「内のデッサン」である」という石井鶴三氏の教えを追求し、また自身の「正しい生活を大切にする」「生活は心樞以上にわかりにくく一生の研究課題」「勉強は生活を充実させること」など、その謙虚で実生活に基づいた言葉には深い思想を見ることが出来る。

クラフトマンシップの粋

浦西正幸さんの巻



いきなりですが、松葉屋がお世話になっているクラフトマンの方たちを、『クラフトマンシップの粋』というキーワードで紹介していくスペースをオープンいたしました(スペース名を『crafteria』といいます)。ゆくゆくはクラフトや、それらにまつわる、さまざまな活動をしていってくださる方々に共有していただける『場』として育ってくれたら嬉しいな、と思います。

大阪で育ち、東京でプロダクトデザイナーを仕事としていた浦西さん。現在は飛騨古川に住み、制作の他にも、シヨップのオーナー、クラフトのプロデュースをするなど、広く活動されています。

シヨップ (hida craft) は、古川の町に見つけた空き店舗を自ら改装しました。日常に、ひとつ、花を添えるような暮らしの道具、雑貨たちは、飛騨に暮らす作家さんの手によるものですが、浦西さんとのセッションによって生まれた作品もちらほら。

「ただ作ってもらったものを並べるだけではなく、ここから発信できる『なにか』を作りたい」



上 ■ 5月の一枚板展。
左 ■ ご自宅で奥さまと、和裁をされている奥さまは、一番身近な手仕事の人。

「クラフトに限定しない『いい』と思ったものを集め、そして紹介していきたい」
と云う浦西さんの目線。いつも前向きな姿勢(バイタリティ)に、松葉屋も良い刺激を受けています。



飛田さんの本
右『飛田和緒の10年もの』には松葉屋も載っています。

以前より松葉屋の家具をお使いいただいている飛田和緒さんが今年の5月に椅子をオーダーされました。その時は非に、と椅子の張地に選ばれたのがリネットのリネン。木の肌と、少しザラリとしたリネンの手ざわりが涼し気で、シンとした雰囲気伝えます。もうすぐできあがるこの椅子の何気ない存在感がともも良くて、松葉屋の店内にも並べることにしました。

このたび
あたらしく並ぶ
リネンの椅子は、
今年5月、
飛田和緒さんの
ご来店が
きっかけでした。

松葉屋家具店

〒380-0841 長野市大門町45
TEL026-232-2346
FAX026-237-4558

(木曜定休)

© 松葉屋家具店+道具学研究所2006
All rights of copy in this paper are reserved
Design & Text. * kai-pan



納品日記...

2006年6月
東京昭島市S様
うつくしい木理
タモ
一枚板テーブル

10月1日ヨリ
9日マデ

小平彩見
版画展
松葉屋二ノ階ニテ



予告